69. 小平奈緒選手

スピードスケートの小平奈緒選手（36 歳、相沢病院）が、全日本距離別選手権の女子 500 m で 8 連覇を果たし、引退レースで有終の美を飾った。レースを「ありのままの自分を全て表現できた。心が震えて、飛び出てきそうだった」と表現した。

小平選手の話す言葉を私は以前から気に入っていて、記事の切り抜きをしてきた。その独特な言い回しは「氷上の詩人」とも言われ、小平奈緒語録というようなものもネットにある。今回もどんなことを喋るのかと期待して新聞を待った。

レース展開中の「小平」の気持ち入れた記事は、「ワクワクして、大好きなスケートを滑っている」、「（氷との対話を）はじかれている。けんかしているな」、「（足になじんだ感触を）親友になれたかも」、「（自信を胸にスタートを）自分の体を使った完成形」と伝えている。そして「自分のレース後は次走の高木らを気遣い、拍手や声援を抑えるよう観客に促した。その姿は 4 年前の平昌冬季五輪で金メダルを獲得した時のよう。スケート靴を履いて 34 年。滑りでも振る舞いでも絶頂期を彷彿とさせながら、さわやかにリンクを降りた」とも記事にある。

これだけでも「人物」であることを感じるが、レースを振り返った一問一答の中から二つだけを挙げてみる。ここにもに「人物」を感じる。

―今日の滑りに点数を付けるとしたら。

「点数は付けない。唯一無二だ。自分のことを数字で評価はしない。人生に満点はなくて、数字で測ったらいけないと思う。自分を決めてしまうことになる」

―今後に向けて。

「私の歩みはまだまだ止まらない。スケートリンクを越えたフィールドに、飛び出していく。元気よく飛び出して、たくさん失敗して、できないこともできるようにチャレンジして、歩みを進めたい」

また後日の引退会見の一問一答も興味深い。一つだけ書く。

―スケートを通じて学んだことは。

「小さな勇気を持っていれば前に進める。今後氷上とは違う環境で、できない事もあるかもしれないが勇気を持って挑戦してみようという気持ちで幼い頃と同じように生きていきたい」

小平選手の生きざまとはどういうものだろうか。下手なまとめ方では粗雑のそしりを免れないが、「大変な努力家で、地に足のついた生き方をしているだけでなく、その経過や方向性、そして生き方を表現する言葉を持っている人」とでも言おうか。その言葉に強い納得性があるので人々を感激させるのだろう。今後は乞われて母校の特任教授になり授業も受け持つという。世話になった相沢病院にも彼女なりの恩返しをしていくのだろう。羽ばたくに違いない。

追記１：小平奈緒語録の一端（ネット上からランダムに）

「成し遂げることは出来なかったけど、やり遂げることは出来た（北京オリンピック）」、「目の前に表現できる舞台があること。それは、もう二度と返ってこない一瞬であるということ。だから、表現できる今に目一杯感謝して、滑りたい」、「武者修行は自己管理が大事」、「追い込むか。追い込まれるか」、「男子並みの負荷をかけた練習をしたい。私は本気」、「日常生活では 24 時間スケートを考えている。休むことも友達と話すことも突き詰めればそこにつながる。磨き上げた自分自身を五輪に持っていきたい」、「視線の先に映る自分の姿を信じて」、「自分のトレーニング環境をいかに作り出すか、考えて、工夫して、創造する」

追記２：大相撲の御嶽海との対談も示唆に富んでいる（省略しますが、ネット上にあります）。

（2022 年 10 月 31 日）